和泉を守る ゲートキーパー宣言 森ひさゆき

和泉市鍛冶屋町在住、今年５５歳を迎える。妻と子供２人、愛犬チビ・ラメの2匹。
有限会社テクノ工業取締役、少林寺拳法和泉南道院長(大拳士６段)、前衛書道家、小学校PTA会長、大阪芸術大学グループ塚本学院校友会常任理事、大阪芸術大学武道連合会初代会長。好きなことは映画鑑賞。食べれないもの肉類。特に関心のあることは「人が生きる」ということ。自分の経験を中心に、生き抜くためのゲートキーパーとしての役割を果たしたいとおもっている。人生を大いに語りあいたい。

プロフィール

合掌
S32和泉市浦田町に生まれる。ひとことでいうと大阪で俗に言うボンボンとして育つ。
南池田小学校の卒業式で在校生代表の挨拶を全く忘れ先生からの失望のことばがいまも残っている。石尾中学校ではバレーボール部で頑張る。某先生からの怒りの鉄拳は拳の形のまま心にしまっている。横山高校(現在廃校)は豊かな自然と人間関係はすばらしかった。バレーボール部、美術部に在籍。負けてなるかと硬派で大きなロマンを胸にまっしぐら。すこし長めのガクランはすべての象徴であった。大阪芸術大学に入学してこれでもかと上下関係の厳しい少林寺拳法部に入部。根性では負けない、主将を経て卒業後人づくりによる国づくりの大志を抱き地域青少年健全育成を目指し少林寺拳法道場を設立。「半ばは自己のために半ばは他人のために」このことばに惚れてしまった。早いもので設立後30年になる。すばらしい弟子たちとの出会いに感謝する。同じく大阪芸術大学研究室に残り非常勤講師として、並行に阪南大学高等学校、大阪商業大学堺高等学校の非常勤講師として教鞭をとる。教職で人生を終えることが生きがいであったが夢がかなわず31歳でタイムアウト―。
32歳のとき「青年としての英知と勇気と情熱をもって明るい豊かな社会を築き上げよう」を理念に堺青年会議所に入会。友人の推薦であった。堺大魚夜市委員長、専務理事、全国大会主催時副理事長と全力で突っ走る。翌年の理事長選に出るも議長裁決で惜しくも敗退。
－その後自身のいたらなさのため転落の時がやってくる。すべてを無くし、人生とは何かを全身全霊で考えさせられる。自分の不甲斐無さと詫びのおもいで生きている価値を問う日々であった。40歳のときである。

ゲートキーパーとは

本来「門番」という意味ですが、悩みや話しを聞いて、必要な支援につなげ、見守る人のことです。いわゆる生きることを支援する人と解釈しています。

過激な言葉は得意としませんが、本質に迫ります

森ひさゆき後援会
代　表　藤木　厚一
事務所　和泉市鍛冶屋町344-2
電　話　0725-55-3799
ＦＡＸ　0725-55-4288
ホームページもご覧ください。
http://www.morihisayuki.com
Mail：info@morihisayuki.com

ゲートキーパーになるおもい

何不自由なく育った少年時代。生き方は母の影響が大きかった。父は静かに見守ってくれた。少林寺拳法部との出会いが自分の方向性につながる。生きがいであった教職の破綻。青年会議所での経験は糧となる。世間知らずの自分に起こる痛感する出来事。人が生きるということを考える。生きていていいのか葛藤の日々。父母の顔が浮かび自分を守る。４０歳の時であった。
消沈から１５年の歳月がたった。というより１５年の歳月がかかったということである。人生はこれからであるとおもえるまでに―。
前述することはプロフィールのまとめになりますが、もうすぐ５５歳を迎える私の気持ちです。その時々を経ていまがあります。ここまで生き抜いてこれたことを幸せにおもい、それを全うできたお力添えをいただいた方々に感謝の気持ちでいっぱいです。
自分の経験を踏まえ人生を生き抜くための協力者になりたいと強くおもっています。

FAX 0725 － 55 －4288 専用

（キリトリセン）

【ご意見などをお聞かせ下さい】

ふりがな ご氏名		生　年　月　日 T S H　・　・
ご住所	〒　－	
電　話	―　―	
携　帯	―　―	

―その後15年の歳月を経て今の自分にある。戒めと本当の大切なものは何かの追求に明け暮れの毎日であった―。 環境衛生関係と建設機械関係に従事した恩恵は大きい。
捨てる神あれば拾う神もあると本当におもう。ありがたい。後悔はするなというけれどそれは無理な話である。ただ今この時から前向きに進まなければ人生は無いとおもうようになっていった。今の家族がそのおもいの始まりである。　失敗した経験が驚くほど次のステップへと進めさせてくれる。現会社の設立にもまったくの経験が生かされたことに感謝する。失敗は成功のもとである。地域社会へのかかわりがどれだけ大切か若き時にかけた情熱をもう一度地域へと踏み出そうとおもっている。少しだけれど培った人生の経験は生かせそうである。　人生の教訓に「恨みは水に流せ、受けた恩は石に刻め」、私流ではあるが生きる勇気を持たせてくれる言葉である。　基本的に肩書にこだわるおもいはない。肩書を失った自分に肩書は必要ないことも熟知している。しかしその時代時代に出会った素晴らしい人たちは自分の自分歴として一冊の本を完成させるのに記録は必要になる。人生の残りのページに加筆し続けなければならない。熱き心を持つ時間をおもいっきり地域社会に費やしたい。　　結手

捨てる神あれば拾う神もある。世の中はうまく出来ていて、見捨てる人がいれば助けてくれる人もいる。悪いことばかりではない。

議会とロバート議事法

市民にとって大切な議案の成立が、システムのために議決出来なかったり、議案の手続き順序違いにより廃案になったりと、本当のところ求める視点が専門職過ぎて大義を見失っているように感じる。それよりも個人的な感情の擦れ違いが議会の焦点にすり替えられている懸念さえも伝わってくる。
以前にロバート議事法を学んだことがある。1.多数者の権利、文字通り多数の者の意見を優先する表決の基本原則。2.少数者の権利、少数の意見といえども大切にし、討論する。3.個人の権利、個人への名指し攻撃、特定人物のプライバシーに関する件には触れてはならない。4.不在者の権利、やむをえず出席できない者にも議決権を与えようというもの。委任状、不在者投票など。私はロバート議事法の原則に触れ陶酔したことを覚えている。いかなる状況おいても、人物に対する攻撃をしてはいけません。提案に攻撃や、その提案自体を問題にしてはいけません。ほんとうにすばらしい議事法である。個人的には特に2.少数者の権利と3.個人の権利には感じるところが多い。
　さて議会の任務は「行政執行の監視役と共に行政と一体となって良好な町づくり、住民の福祉等の向上に最大限寄与する役割を果たしている云々―」。 市民の目線でわかりやすく、

本当に大切であることが議決されなければならない。既得権が優先されたり、市民の大切な思いが置き去りにされてしまうことは許されない。

本当に大切であることが議決されなければならない。ここにも既得権が優先されたり、市民の大切な思いが置き去りにされてしまうことは許されない。

和泉市投票率50%の不幸

　誰が市長、市会議員になっても政治は大きく変わらないとよく耳にする。そのはずである。有権者の半数の人たちで政治が決められている。１００人の決めごとを５０人の意思で決めているのである。そこには５０人の意思が反映されていない。５０人が参加していないのである。誰が考えてもそれが必要だということがある。しかしその必要なことが得られない複雑なシステムや構造が既存している。一番厄介な既得権を持つ人たちが支配する仕組みが成立している。既得権は言葉の通り既にその権利を得ていることであり、この先までも権利を得続けようとするおおきな力である。特に社会情勢の変化においてもなおも旧態のままで死守しようとする権利となって立ちはだかるのである。
　今を大きく突っ走る”維新の風”は”都構想”のためにその既得権と闘うことを掲げている。風はやみそうにない。昨秋の大阪市長選で平松氏の得票は前回を大きく上回った。しかしその中で無党派層と呼ばれる人たちが大きな風となって自分たちの意思を発揮した。
そこで参加していない５０人の意思の反映が重要になってくる。たとえば、年金の構造を知ろうとしない若者がいるとする。その結果がどのようになっても年金の構造をつくる国や政治家の責任と言い張るであろう。下支えの仕組みが成り立たないことを理解し今後の年金制度の在り方に参加しなくてはならない。なぜなら直接自分たちの生活にふりかかってくるからである。知らないでは済まされない社会全体の危機的な構造が存在するからである。
　「主権在民、主権が国民にある。日本国憲法は前文で宣言している。」　政治の仕組みをもっと身近にわかりやすく、政治に参加できる機会を出来るだけ早いうちに経験する、そんな仕組みづくりが今後必要になる。なによりも自分達の意思が反映されていないことが問題であり、興味がない、知らないではすまされない現実がそこまで迫っている。
　ただ参加する有権者の50%においてもどれだけ意志をもって政治に参加しているかは考えさせられるところである。親戚だから友人だからがあるとしても50%以上の意志がそこに存在するなら尚考えさせられることになる。

今を大きく突っ走る”維新の風”は”都構想”のためにその既得権と闘うことを掲げている。風はやみそうにない。

主権在民、主権が国民にあること。日本国憲法は前文で宣言している。―選ぶのは市民である。興味がない、知らないではすまされない現実がそこまで迫っている。